

Robotics Report

新たな常識のはじまり

自動車メーカーやIT企業が狙う ブルー・オーシャン、「MaaS」とは

nikko am
fund academy



世界各地で開催されている大規模なテクノロジーイベントにおいて、自動車メーカーやIT企業、通信企業などが、コネクティッドカーなどの「知能化された自動車」やそれらを使った新しいサービスを次々と発表しています。これらは、自動車産業に革命的な息を吹き込む全く新しいビジネスモデルであり、MaaS(Mobility as a Service)と呼ばれています。そこで、今回は注目が集まるMaaSの概要をご紹介します。

■ 移動手段を「共有」する新しいビジネスモデル・MaaS

MaaSとは、ユーザーが自動車や自転車などの移動で使うモノ『モビリティ』を所有し、自分で運転して目的地に向かうのではなく、サービスとして利用料金を支払って利用する『サービスとしてのモビリティ』です。これは、ユーザーが移動手段を「所有」ではなく「共有」する、という新しいビジネスモデルなのです。

MaaSという言葉には、新たな「交通管理システム」という技術的な意味合いも含まれています。例えば、インターネットのプラットフォーム上で、移動手段『モビリティ』の稼働状況とユーザーの需要を把握して最適化すること、MaaSの技術的特徴なのです。ユーザーと空き車両を効率的にマッチングできれば、両者の待機時間を大幅に短縮するだけでなく、混雑や事故、環境破壊など、都市レベルで交通問題の解消に大きなメリットをもたらします。

また、ユーザーに対して、目的地まで複数の移動手段や情報を「パッケージ」にして提供する、といったこともできます。実際、フィンランド・ヘルシンキでは、ユーザーが目的地を検索するだけで、地下鉄やバス、タクシー、自転車など利用可能な『モビリティ』情報を集めたデータの中から最適な移動手段の組み合わせが提供され、予約から決済までができるスマートフォンアプリ、「Whim」のサービスが始まっています。



※写真はイメージです

■ 自動運転車のMaaS市場は、2030年代初頭までに10兆米ドル超

現時点のMaaS市場の成長のけん引役は自動運転技術とみられ、Googleから分社化した自動運転開発企業のウェイモや電気自動車のテスラ、カーシェアリングサービスのウーバーなどが開発を進めています。



※写真はイメージです

MaaS市場における自動運転車は、人を乗せて走る「自律移動型ロボット」ともいえ、MaaSを実現させるためには、交通状況や移動したいという需要をリアルタイムに収集して分析し、適切なマッチングを瞬時に行なう必要があり、AI(人工知能)などの先端技術がこれを支えていると考えられます。このように、MaaSの普及は既存の配車システムやドライバーの人的コストといったコスト上の問題などを解決し、ユーザーに快適な移動手段が提供されることになるとみられます。

MaaSは新たなビジネスモデルだけに、全容や可能性は徐々に明らかになると思われませんが、ARK Investは、「MOBILITY-AS-A-SERVICE:なぜ自動運転車は全てを変えうるのか」のレポートの中で、自動運転車のMaaS市場の総売上高は、2030年代初頭までに10兆米ドル*を超えるとみているようです。日本では2020年までに高速道路での自動運転の実現を目指しており、期待感は着実に高まっています。

*実用化が見込まれる自動運転車の走行が、自己保有ではなく全て自動運転タクシーにより行なわれ、関連企業の売上に計上されたと仮定

上記銘柄について、売買を推奨するものでも、将来の価格の上昇または下落を示唆するものでもありません。また、当社ファンドにおける保有、非保有、および将来の個別銘柄の組み入れまたは売却を示唆するものでもありません。

(当レポートは、株式会社ロボティアの情報をもとに日興アセットマネジメントが作成しています。)

■当資料は、日興アセットマネジメントがロボティクスに関する情報についてお伝えすることを目的として作成したものであり、特定ファンドの勧誘資料ではありません。また、弊社ファンドの運用に何等影響を与えるものではありません。なお、掲載されている見解は当資料作成時点のものであり、将来の市場環境の変動等を保証するものではありません。■投資信託は、値動きのある資産(外貨建資産には為替変動リスクもあります。)を投資対象としているため、基準価額は変動します。したがって、元金を割込むことがあります。投資信託の申込み・保有・換金時には、費用をご負担いただく場合があります。詳しくは、投資信託説明書(交付目論見書)をご覧ください。